

「日本国図」から見た鄭若曾の日本認識

許 海華（浙江工商大学日本語文化学院教員） XU Haihua

明代は中国における日本認識が飛躍的に拡大した時期である。東アジアの海上貿易が大いに発展した時代で、日本についての情報もこれまで以上に中国に流入するようになった。そして、嘉靖年間における倭寇問題の深刻化によって、対倭海防の参考を目的とする日本研究書が大量に撰述され、日本認識はにわかに深化してきたのである。

それらの研究書が中日関係史の研究にも史料的高いものとして注目され、先学の研究で諸々論じ尽くされたのである。

本稿では、視点を史料の文字から画像に変え、明代の地理学者鄭若曾が作った「日本国図」に着目し、地図に映された日本認識を考察する。

1 鄭若曾と「日本国図」

鄭若曾は、字は伯魯、号は開陽であり、江蘇崑山人である。東南抗倭主将である総督胡宗憲に才能を買われ、その幕下にあって倭寇の対策に尽力した。『皇明分省地理志図考』、『海防一覧』、『万里海防図論』、『江防図考』、『黄河図議』、『海運図説』、『朝鮮図説』、『安南図説』、『琉球図説』、『江南経略』など幾多の労作があり、『日本図纂』と『籌海図編』が日本認識の水準を大きく高めた著書とされている。

『日本図纂』の序によると、その成立は嘉靖40年(1561)5月であるが、『籌海図編』の成立を茅坤の序により嘉靖41年3月とすれば、両者の編纂期間にはわずか10ヶ月の隔たりしかなく、時間上の親近性が指摘される。『籌海図編』の日本研究は大体巻之二に集中しているが、この部分と『日本図纂』をよく比較してみると、『籌海図編』の日本研究の部分は、ほとんど『日本図纂』からそのまま写されているが、ただ「市泊」から「附日本貢使詩」までの項目は『籌海図編』にとられていないことがわかる。

先学の諸研究に指摘があることだが、『日本図纂』に載せられた「日本国図」と『籌海図編』の巻之二のそれはほとんど同一のものである。筆者の調べでは、嘉靖40年(1561)に成立した『万里海防図論』にある日本国図は方向も、形も文字もほぼ同じもののように考えられる。

つまり、「日本国図」が仕上げられたのは遅くとも嘉靖40年であったという推定が妥当ではないだろうか。

なお、元代の朱思本の完成した『広輿図』を、明代に至って羅洪先が整理したものに、さらに浙江布政使胡松が日本に関する新しい研究を付加し、嘉靖40年に『広輿図』が復刻された。この嘉靖版『広輿図』には、「崑山鄭子若著」と署名のある「日本図」が載せられている。「崑山鄭子若」はすなわち鄭若曾である。ゆえに、『日本図纂』が刊行された同年に、「日本国図」がもう胡松に知られ、「日本図」の名称で『広輿図』に転載されたことがわかる。

2 「日本国図」に描かれた日本

文字より画像資料の直観性と情報の豊富さからみると、「日本国図」は日本に関する知識の導入に貴重な資料であったと思われる。嘉靖初年に定海の薛俊が編纂した『日本考略』に載せられた「日本地理図」と比較すれば、「日本国図」に含まれる日本知識はかなり進んだことがわかる。

さらに「日本国図」においてどの程度日本が認識されたかを明らかにするために、天正17年(1589)写『拾芥抄』所載の「大日本国図」と対照して考察することにした。「大日本国図」に描かれた日本と比較した結果は、「日本国図」に描かれていないのは「讃岐」一国だけで、地名で誤記されたのは「相摩」(相模)、「甲裴」(甲斐)、「飛弾」(飛騨)、「若佐」(若狭)、「太和」(大和)、「丹渡」(丹波)、「撰摩」(播磨)、「伯岐」(伯耆)、「炎路」(淡路)、「伊岐」(吉岐)の十箇所である。一步進んで諸国が所領した郡の数を比べてみると、郡の数が完全に一致しているものは少なくとも35あり(はっきりしない印刷の場合、計算に入れず)正確さは50パーセント以上に達する。また、地域によって正確さが違い、「西海道」が最も高く、「山陽道」は2位である。

ほかに、「日本国図」を全体的に見ると、各地域に関する情報の量にもかなりの差があることがわかる。東山道、北陸道、東海道、畿内地方は、ほとんど国名と所領郡数しか描かれておらず、国の形や相互位置の誤りも珍しく

ないが、これにたいして、西海道・山陽道の国々に関する知識は詳細で客観性の高いことが見られる。

この情報の「西詳東略」は、鄭若曾の日本知識が嘉靖34年に「宣諭日本」した蔣州・陳可願の見聞によるところが多かったことから解釈できる。明史・日本伝、胡宗憲列伝により、大友義鎮・大内義長に倭寇鎮撫を要請することを目的とし、蔣州・陳可願は豊後・山口に赴いたのである。「西海道」と「山陽道」に関する情報が特に豊富である原因は、経験者の見聞によるからではないか。

3 「日本国図」の影響

『籌海図編』が後世の日本研究に大きく影響を与えたよ

うに、「日本国図」は後の多数の日本研究書に収められた日本図に継承された。管見に入ったものだけで、李言恭『日本考』の「日本国図」、侯繼高『全浙兵制附日本風土記』の「日本国図」、蔡逢時『温処海防図略』の「日本倭島図」、章潢『図書編』の「日本国図」、茅瑞徵『万曆三大征考』の「日本図」などがあるが、中には原図の南北を逆転してそのまま転載したのもある。この点だけ見れば、鄭若曾の「日本国図」は明代における日本図の「決定版」といえるほど、後世から重視され、参考とされた画像資料であるように考えられる。

(許海華氏は2007年10月10日~23日まで訪問研究員として来日された。)

REPORT

REPORT 4 訪問・派遣研究員によるレポート

REPORT 5 REPORT 6

対照的な日本

唐沢 ダニエラ (サンパウロ大学大学院 日本語・日本文学・日本文化修士課程) KARASAWA Daniela

初 めての飛行機、初めての海外。2006年12月の日本での2週間は大きな発見と神奈川大学COEプログラムへの感謝で一杯の期間であった。

幼少の頃より、私は常に日本についての本や雑誌に触れ、リベダルーデ(自由)という東洋人地区の日本人のお婆さんたちの話を聞いていた。そのミュージカルのような言語は魅力的であったが、一音もわからなかった。大学の日本文学科に進学してはじめて、幼少時に耳にしたミュージカルの魅力を理解し、また今回の日本への旅でさらに新しい発見ができた。それは進歩的集中的な学習による、この素晴らしい言語の細かいニュアンスであった。

1 漫画のグローバル化(グローバリゼーション)

筆者が行っている研究は漫画のグローバル化とそのブラジルにおける影響、また青少年に対する社会的、商業的様相についてである。私は、2005年半ばに始めたこの研究を2006年末に修了し、日本文化研究の修士号を取得する予定である。

しかしブラジル社会の中にある漫画と日系人のブラジルにおける位置を語ることは複雑であるし、ブラジルの

伝統文化から離れたものである。ブラジルが日本からどんなに多様な品々を大量に輸入する時代になっても、漫画は数十年来日系人だけのものではあった。つまり、日系人と何らかの関わりを持たないブラジル人には日本語が読める人は少なく、またポルトガル語ができない書店の店主と会話ができる人もいなかったからである。

90年代に入ってやっと、ブラジル国内で非日系人への漫画販売が拡大していく。ポルトガル語訳版の普及により、日本語が理解できなくても、漫画に興味を持った人が漫画本を買い集めるようになったのだ。

ブラジル文化のもう一つの特徴は、新しいトレンドや行動に対して、海外での成功を待って見解を決める傾向があるということである。ブラジル企業はフランスやアメリカなどでの漫画の成功を待ったのち、このジャンルの娯楽の可能性を信じるようになる。

最近ブラジルでは、漫画というものは宣伝や出版業界でよく見られるように、「コミック」が美術の概念に含まれるようになった革命と見なされており、ブラジルの若者の日本美術の概念に対する注目は漫画とアニメに端を発するものである。